

1983年12月5日

## 海鳥を見る楽しみ

中村 登流

大きい翼を張って、洋上をすべるように飛ぶ海鳥の姿には胸のすく快適な情感をおぼえる。波が湧きあがってくる斜面をひくく流れて行き、せりあがった波頭がくずれる頃、そのあおりに乗るように上昇していく。みるみる翼をかたむけ、コアホウドリともなると、ほとんど鉛直にまで達する。翼軸を中心に回転しながら、再び水平へむかってそして低くもどっていく。同時に体軸を中心にしたゆるやかなカーブを描いて、次の波のうねりに入って行く。その流れる線をあかず眺めることが、まず海鳥を見る入り口だろう。

オオミズナギドリの小群だと、そろそろとつらなるように上空へおどり出し、波形を描いて下降していく時に、その姿をみとめることができる。ハシボソミズナギドリの群飛の中へ入ると、海上を螺旋を描いて前進しているように見える。実際は左右へゆれる波形と上下にゆれる波形が組みあわさった、立体的な運動である。それが左右交互に組みあわさって並ぶ波のうねりとびったりあっている。波の形や動態にあわせた行動のあることは、どこに住んでいる鳥にも見あたることだ。海鳥の持つ体長よりも翼開長のずっと大きい独得の形態は、波間に餌を探索する行動を決定し、その基本的な運動パターンのために開発されたに違いない。何しろ、洋上では海の波と、時々通りすぎる海鳥しかほかに見るものはないので、波のことで、鳥のことしか考えることがない。

海鳥を見るためにだけ船に乗る人も次第にふえて来た。東京から釧路へ行くフェリーに乗ると、大低鳥を見ている誰かに会う。たぶん日本近海で最も鳥の豊かな航路だろう。思いがけない珍鳥も時々記録されている。沖縄から東京へのコースは鳥の種類が少い。しかしオオミズナギドリが多く、いろいろの生活相に出会う機会が多い。そこで、大群が洋上にドーナツ状のリングをつくって飛びまわり、リングの内側へむかって次々に飛びこみをするのを見たことがある。それもまた新しいものを見る喜びにつながる。船まかせだから、一つの航海ですべてを見ることなどとてもできない。何かを見つれたり、ましてそれをまとめようとしたら、ずい分と時間がかかるだろう。海鳥研究グループができるという。期待したい。

日本鳥学会1983年度大会終る（9月17～18日 於・東大）



## 「日本海鳥グループ」発足する

長谷川 博

1983年10月20, 21日に東京大学海洋研究所で開催された「海鳥の分布・生態に関するシンポジウム」の場で、「日本海鳥グループ」(Japan Seabird Group)が発足した。

日本は四方を海に囲まれ、亜熱帯から亜寒帯海域にのびる大小3,000余りの島々からなっている。その海岸を世界でも有数の海流が洗い、多様で豊かな海洋環境を形づくっている。そして、近海には数多くの海鳥が訪れ、島々は多くの種類の海鳥の営巣地となっている。日本は海鳥研究の格好の場とてよい。

しかし、残念にも、海鳥たちは、まだ多くの研究者・観察者をひきつけてはいない。それでも、近年、少しずつ、海鳥に関心をもち、調査・研究、観察する人が増えてきている。この傾向を一層促進し、海鳥に興味をもち研究・観察している人の交流を深め、情報を交換し、おたがいに刺激しあうことを第1の目的として、このグループが編制された。またグループは、共同で作業を進める希望をもち、場合によっては海鳥の保護、海洋環境の保全についても検討、提言する計画をもっている。

このグループ結成には二つのきっかけがあった。そのひとつは、1982年7月10日に東大海洋研で行なわれた日本生態学会関東地区会例会(小シンポジウム「海鳥の生態」、4名講演)で、このあとの懇親会で、「海鳥研究グループ」をつくってはどうかという提案がなされたことである(日本生態学会関東地区会会報31, 15-16, 参照)。

もうひとつは、1982年8月3~5日にイギリスのケンブリッジで催された国際鳥類保護会議海鳥部会シンポジウム(I.C.B.P. Seabird workshop)とそれに引き続いて8月11日にモスクワで行なわれた国際鳥類保護会議/国際鳥学会議の海鳥委員会(I.C.B.P./I.O.C. International Seabird Committee)の総会で、この会議に出席された黒田先生が、西太平洋の海鳥グループの結成を希望されたこと(「海洋と生物」5:321, 参照)。

このような背景から、「まず、日本の海鳥研究をしっかりとさせねば」という考えで、海鳥グループを組織するための検討が始められた。もし、発足させるならば、何か「お祭り」をやったほうがよいということになり、東大海洋研の共同利用研究集会開催を申し込み、それが承諾され、シンポジウム開催の運びとなったのであった。

まだ生まれたてのほやほやで、すべてこれから。それでも、すでに50名近くのかたから会員申込みがあった。ごくこじんまりとしたグループである。しかし、今後、日本の海鳥のさまざまな面について、少しずつ明らかにしてゆこうと熱い思いを抱いている人たちがばかりからなっている。この「日本海鳥グループ」に興味をもたれたら、遠慮なく下記に葉書きで連絡をして下さい。

〒274 千葉県船橋市三山2-2-1 東邦大学理学部海洋生物研究室

「日本海鳥グループ」事務局 長谷川 博

## 海外の“海鳥グループ”について

人間による便利さの追求は、時としてはかり知れない大災害・自然生態系の攪乱をひきおこす。農薬禍は陸鳥をむしばみ、「沈黙の春」を現出させ、海域の油汚染は海浜域生物群集を死滅させ、油にまみれた

海鳥は飛ぶ自由を奪われて絶食餓死し、海浜に打上げられた。その最大の惨事は1967年3月の大型タンカー“トリー・キャニオン号”の座礁であった。また、海鳥の体内にも有機塩素系化合物（DDT, BHC, PCBなど）や重金属が蓄積されていることが明らかになり、地球的規模での環境汚染の実態がうかがいあがった。

こうした事態は深刻かつ冷静に受けとめられた。1965年に、W. R. P. Bourne がイギリスで海鳥グループ結成をよびかけ、1966年に発足した。この会は、海鳥研究者の交流と共同調査、海鳥の保護を目的に活動している。年会を開催し、年報（1983年以後、雑誌Seabird）を刊行し、定期的にサーキュラーを配布している。共同作業の成果のひとつは1974年に出版された、「英国とアイルランドの海鳥」（The Seabirds of Britain and Ireland）なる本である。

イギリスにはもうひとつの特殊だが伝統ある海鳥研究団体がある。それは、イギリス海軍の鳥仲間が主となっているRoyal Naval Bird Watching Societyで、機関誌*Sea Swallow*を刊行している。そして、世界各地を航行する船から送られてくる観察記録を整理・記録している。それらのひとつの集成が世界の海鳥についてのガイドブック（A Field Guide to the Seabirds of Britain and the World, 1978; A Guide to Seabirds on the Ocean Routes, 1980）である。

イギリスの海洋鳥学は世界をリードしている。1977年3月にアバディーン大学で諸団体共催で海鳥会議が催された。その記録（*Ibis*, 120:101-136）を読むと、そのことがよくわかるだろう。

やや遅れて、1972年にはPacific Seabird Groupが発足した。おもに北アメリカ太平洋岸、ハワイ諸島の海鳥の研究と保護を目的としている。年会を催し、会報（年2回）を配布している。

このほかオーストラリア、ニュージーランドにAustralian Seabird Groupがある。この団体は年会をもたず（広すぎて集まれない）、もっぱら会報を配布を通じて連絡がとられている。また、アフリカ大陸両岸の海鳥を対象としたAfrican Seabird Groupもある。これは、かつて南アフリカ地域の海鳥を対象にしてニューズレターを発行していたが、発展的に解消して再編制されたものである。現在、雑誌*The Cormorant*を年2回発行している。

こうしてみると、欠けているのは西太平洋アジア地域と中・南アメリカということになる。日本の海鳥グループは5番目である。

これらの地域別の海鳥グループを統合する国際的な海洋鳥学会を編制し、独自の雑誌を刊行しようという提案がされたが、いまのところ具体的進展はないようである。

以下に連絡先を記しておく。

*Seabird Group*: Dr T R B Birkhead, Hon. Secretary, Department of Zoology, University of Sheffield, Sheffield S10 2TN, U. K.

*Pacific Seabird Group*: c/o Wildlife Research Field Station, Humboldt State University, Arcata, California 95521, U.S.A.

*Australian Seabird Group*: P.O.Box 65, Civic Square, ACT. 2608, Canberra, Australia / または P.O.Box 12397, Wellington North, New Zealand.

*African Seabird Group*: Dr R K Brooke, Treasurer, Percy Fitzpatrick Institute for African Ornithology, University of Cape Town, Rondebosch 7700, South Africa.

## 海鳥についての図書・文献 簡単な紹介

海鳥とよばれる鳥の仲間は、全部あわせてもただの270種、現生鳥類約9,000種のわずか3%を占

めるにすぎない。それでも、近年、海洋（資源、環境汚染、軍事など）に対する関心が世界的に高まり、海鳥への関心も深まってきている。そして、多くの研究が発表され、本も出版されるようになった。ここでは、ごく大雑把に海鳥関係の図書・文献を紹介したい。

分類・形態学を除けば、海鳥についての最初のまとまった本は、Alexander によるものであろう。初版は1928年に出版され、1954年に改訂新版が出た。<sup>1)</sup> 1936年には、海洋鳥学の記念碑的大著がMurphyによって著された。<sup>2)</sup> 最近、海鳥と海洋との関係を研究した論考が発表されるようになり、<sup>3)</sup> また、カラー絵や写真を豊富に用いた一般向けのやさしい解説書も出版されるようになった。<sup>4)</sup> ただし、これは注意して読む必要がある。

海鳥の洋上分布や移動を調査するためには、正確で使いやすい「識別ガイドブック」が必須となる。近年、この種の本がいくつも出版され、<sup>5)</sup> 世界の海鳥についても一冊の本で間に合うようになった。<sup>6)</sup> しかし、情報不足や無理をおしてのとりまとめという感を否めず、若干の誤りも含まれる。いくつかを比較検討するのがよいだろう。

このほかに、地域別の海鳥ハンドブックも出版されている。オーストラリア、<sup>7)</sup> イギリス<sup>8)</sup> のが利用できる。地域別鳥類ハンドブックには各種の詳細な記述がある。<sup>9)</sup> 繁殖分布や洋上分布を取扱った論文集、調査報告書、またシンポジウムの論文集も多く刊行されている。<sup>10)</sup> このうちで、1982年8月にイギリス、ケンブリッジで催されたICBP総会海鳥部会のシンポジウム記録集は、近々、出版される予定である。<sup>11)</sup> これは、概論と地域別現状報告の2本立てで、最新の情報を知るのによいだろう。

- 1) Alexander, W.B. (1928) *Birds of the Ocean*. Putnam, N.Y. & London. (new & rev. edn., 1954).
- 2) Murphy, R.C. (1936) *Oceanic Birds of South America*. 2 vols. Amer. Mus. Nat. Hist. & Macmillan, N.Y.
- 3) Ashmole, N.P. (1971) *Sea bird ecology and the marine environments*. *Avian Biology*, 1: 223-286. Academic press, N.Y. & London; Shuntov, V.P. (1974) *Sea Birds and the Biological Structure of the Ocean*. National Technical Information Service, U.S. Dep. Commerce, Springfield. (英訳版) など。
- 4) Saunders, D. (Lilly, K., ill.) (1971) *Seabirds*. Hamlyn, London; Nelson, B. (1980) *Seabirds: Their Biology and Ecology*. Hamlyn, London.
- 5) Harrison, P.P.O. (1962) *Sea Birds of the South Pacific*. Royal Naval Bird Watching Society; Watson, G.E., Zusi, R.L., & Storer, R.E. (1963) *Preliminary Field Guide to the Birds of the Indian Ocean*. Smithsonian Institution, Washington, D.C.; Watson, G.E. (1966) *Seabirds of the Tropical Atlantic Ocean*. Smithsonian Inst., Wash., D.C.; King, W.B. (1967) *Seabirds of the Tropical Pacific Ocean: Preliminary Smithsonian Identification Manual*. Smiths. Inst., Wash., D.C.; Watson, G.E. (1975) *Birds of the Antarctic and Sub-Antarctic*. Amer. Geophysical Union, Wash., D.C.; Harper, P.C. & Kinsky, F.C. (1978) *Southern Albatrosses and Petrels: An Identification Guide*. Victoria Univ. Press, Wellington. (\*印はおそらく絶版)
- 6) Tuck, G. (Heinzel, H., ill.) (1978) *A Field Guide to the Seabirds of Britain and the World*. Collins, London; Tuck, G. (Arlott, N., ill.) (1980) *A Guide to Seabirds on the Ocean Routes*. Collins, London; Harrison, P. (1983) *Seabirds: An Identification Guide*. Croom Helm A.H. & A.W. Reed., Kent Frenchs Forest.
- 7) Serventy, D.L., Serventy, V. & Warham, J. (1971) *The Handbook of Australian Sea-Birds*. A.H. & A.W. Reed, Sydney.
- 8) Cramp, S., Bourne, W.R.P. & Saunders, D. (1974) *The Seabirds of Britain and Ireland*. Collins, London.

- 9) たとえば Cramp, S. & Simmons, K.E.L. (ed.) (1977) *The Birds of Western Palearctic*. vol. 1. Oxford University Press, Oxford; Niethammer, G., Bauer, K.M. & Glutz von Blotzheim, U. (ed.) (1966) *Handbuch der Vögel Mitteleuropas*. Bd. 1. Akademische Verlag., Wiesbaden; Palmer, R.S. (ed.) (1962) *Handbook of North American Birds*. vol. 1. Yale University Press, New Haven & London; Blake, E.R. (1977) *Manual of Neotropical Birds*. Vol. 1. University of Chicago Press, Chicago; Brown, L.H., Urban, E.K., & Newman, K. (1982) *The Birds of Africa*, Vol. 1. Academic Press, N.Y. & London;
- 10) たとえば Bartonek, J.C. & Nettleship, D.N. (ed.) (1979) *Conservation of Marine Birds of Northern North America*. U.S. Fish & Wildlife Service, Wash., D.C.
- 11) Croxall, J.P., Evans, P.G.H., & Schreiber, R.W. (ed.) *The Status and Conservation of Seabirds*. (in prep.) I.C.B.P. (以上 長谷川 博)

### <世界の鳥学者・2>

W.R.P. Bourne 博士

黒田 長久

1958年6月、ある朝ヘルシンキ大学の学生寮の自室を出ると長身20代かと思われる若い英国紳士が私を待っていた。その褒しげな話しかけは文通での感じを裏づけるものだった。

彼は私のミズナギドリの骨学論文をいち早く読んで評価してくれて、手まめな手紙でオオミズナギドリとオニミズナギドリを *Calonectris* にする私の骨学論に賛成し、シロハラミズナギドリ類 *Pterodroma* の分類関係(ミズナギドリに近いか、フルマカモメ系か)にも興味をもち、ミズナギドリ目についての文献に通じ(私の論文に文献を多く引用したことに同感し)、個人的な研究も積んでいることがうかがえた。

ここヘルシンキ大学では第12回国際鳥学会議(IOC)が開催中で、博士は今回私の発表する論文(ミズナギドリの南北半球での繁殖期の逆転)の英文を校閲してくれた。お蔭で私は国際学会での論文を自信をもって読むことができ、日照時間と繁殖期の問題を研究中の Wolfson 博士らのコメントもあった。

Bourne 博士は、海鳥の専門家として世界的に知られるようになり、1966年 seabird group を結成し(初代会長はフルマカモメの研究で有名なマスコミにも知られた James Fisher 博士)、名実ともに中心的幹事となった。その後も何度かミズナギドリ・セウミツバメの分類意見の書翰をいただいたが、当面陸上の研究に移ったと伝えたと、ムクドリの研究についても海鳥と同様に期待すると励まされた。そして何年か過ぎ私がミズナギドリの骨の研究補足をしたいと知らせると、早速、大英博物館にあった私の希望した種の骨格が送られてきた。そのご好意に答えるべく私はそれらを比較研究し1966年のOxfordでのIOCに発表すべく Abstract を送ったが、私的事情で私は欠席した。この本論文は年を経た本年(1983)「鳥」に投稿中である。博士の心からの気くばりには感謝の外なく、博士はそういう方なのである。

数あるなかで博士の主な業績は南大西洋の海鳥集団海域を海底からの上昇海流によるプランクトン、従って餌の豊さ、に結びつけた大西洋ではじめての海洋鳥学上の論説や、Cape Verde 島での同じ大きさの巣穴をつくる種は季節を違えて繁殖する(亜熱帯なので可能)という原理の提唱(北硫黄島のクロウミツバメとオーストンウミツバメの例もある— 初山徳太郎氏)。そして、1967年の大型タンカー Torrey Canyon 号の英国沿岸難波の際、船油による海鳥の大量の死亡事件 oil pollution of the sea の徹底調査と保護の論説(Bourne 1970)で海鳥研究と保護を兼ねる第一人者(Murphy 博士に次で)となった。

かくてヘルシンキ以来多くの年を経て1982年8月、私は英国ケンブリッジでのICBPの海鳥ワークショップに参加して、真黒に日焼した堂々たる体格(頭は光るが)の有名人を思わせる紳士に Dr. Bourne 博士に会いたいという、[それは私だ]との返事、博士には私と解っており大笑で握手した。その驚きと嬉びは私も近来稀であった。そしてアメリカの Watson 博士、カナダの Brown 博士やニュージーランドの Harper 博士など、中堅、若手の海鳥学者もこの会議で博士を中心にして談合していた。博士は常に

最前列に坐って必ず何かを発言し、参加者はいつもその海鳥に関する博識に期待して話術と情熱に魅せられた。笑いを誘うユーモアをかもし出す存在感豊かな博士の風貌はダルマがびたりの東洋風ですらある。私には未だにそれが、あの若き日の英国紳士と結びつかない。しかし、変りないのは、その頼りがいのある人の良さである。長く学会とくに海鳥グループの中心にあって活躍されることと思い、それを心から期待している。

## Movement

### 海外のシンポジウムのお知らせ

生息地のさまざまな変化に対して陸上脊椎動物がどのように反応するか—このモデル化に関する下記のシンポジウムが催されます。これは、この種の研究の今日的まとめを行ない、科学者や野生動物保護・管理にたずさわっている人に展望を示そうとするものです。

Wildlife 2000: Modeling Habitat Relationships of Terrestrial Vertebrates. 7-11 October 1984, Fallen Leaf Lodge, Stanford University's Sierra Camp near Lake Tahoe.

講演・ポスター両形式の発表が予定され、論文の Abstract 切りは講演が1983年12月15日、ポスターが1984年1月31日となっています。ただし参加登録には制限があります。興味をもたれたかたは直接下記に連絡をとって下さい。

Dr. Jared Verner, Program Chairman, Forestry Science Laboratory, 2081 East Sierra Avenue, Fresno, California 93710 U.S.A. phone (209)487-5588.

#### ◎全北区鳥類種形成地図(HASA=Holarctic Avian Speciation Atlas)作成協力要請

HASAは1982年8月、モスクワで催された第18回国際鳥学会議の折、公式に発足。1992年まで10年をかけて、全北区鳥類2000種あまりについて繁殖分布域地図を作成する。特に、時間と空間における生態と進化に重点をおいて、各種に詳細な注釈を加える。すなわち、更新生におこった氷期の交替がひきおこした気候および植生の大規模な変化が、もともとなつた種をいかに分離し新種の形成を促進したか、あるいは、一旦分離された種(地域集団)が再び接触するようになってどの程度の混交がおこっているか、などの点。現在の知識を集成する大計画である。

残念ながら、この間に絶滅した、あるいは危機にある種のうちで、日本にかかわるものは少ない。

この計画の完成には、まだまだ、繁殖分布について正確な情報が不足していて、協力の要請がなされている。この計画の諮問委員会に日本からは森岡弘之氏が参加している。

詳しく知りたい方は、森岡氏あるいは本編集部へ。または直接下記へ。

The Organiser/Editor, HASA

134 The Avenue, Starbeck, Harrogate, North Yorkshire HG1 40F, England.

“知ることは守ること”, “あなたの援助は鳥を守るのに役立つ”とよびかけている。

(以上 長谷川 博)

### 岡 董高氏「イヌワシ」の絵が入選

昨年7月に、日本芸術家協会、連展に出品の「イヌワシ」の絵(F40号)が、見事入選されました。なお、その絵を本年2月22日、神奈川県厚木駐屯の米司令官A.M.Weyand中将に、日米親善に翔けるゴールデンイーグルと題してプレゼントされたそうです。

## Information

### 例会通知方法の変更について

東京で行なう鳥学会例会を、今まではハガキ印刷で全国の会員に通知してきましたが、費用がかさむうえ、実際には東京近県の方しか参加できず、費用負担の不平等など改善が望まれていました。学会としての例会

を続けていくこと自体は、会の現状と照らしてそれなりの意義が認められます。そこで、これからは次のように通知方法を変更し、さらに例会内容を「鳥学ニュース」にて報告します。（参加者名簿は従来通り「鳥」に掲載）

そのため例会の通知方法を次のようにします。

1. 例会予定を数ヶ月前から「鳥学ニュース」に発表する。
2. 例会が予定通り行なわれるか、延期または中止になるかについての問い合わせは、例会予定日の前3日間の午前8時～午後5時の間に、留守番電話にて応じる。
3. そのため例会に参加予定の方は、事前に電話をかけ実施の有無や会場を確める。

以上、たいへん不便にはなりますが、経費節約のためご協力くださるようお願いいたします。

なお例会は、秋～冬期を中心に3～4回定期的に開催していきます。近県会員やちゅうど上京される会員諸氏の積極的な参加（聴くのと話すのと両方で）をお願いいたします。興味深い研究、観察などの情報を例会幹事までお寄せください。  
(例会幹事 石田 健)

## 例 会 報 告

・1983年4月23日（於・上野動物園）

＜講演＞ 都市公園におけるモズの社会構造（求愛給餌の意味をさぐる）

山 岸 哲氏（大阪市大）

長年にわたる大阪大泉緑地でのモズの研究結果と、特に求愛給餌についての話題。色足環で個体識別した多数のモズについて、なわばりの形成、維持、雌雄の関係を観察し、雌が雄の給餌量によって、その「力量」をはかって番形成をし、維持されるらしいということや、雄が雌に与える餌は雌の子育てにとって実用的な意味を持つようだという興味深い内容であった。

＜短報＞ カワウの特殊な繁殖形態の例

福 田 道 雄氏（上野動物園飼育課）

東京不忍池のカワウのコロニーで、個体識別した調査をしていたところ、次のような繁殖形態が観察された。まず同じ親から孵化した、同腹関係の2羽による番で、これには雄と雄の場合と、雄と雌の場合があった。またさらに3羽の番も見られた。これは両親とその雄の子によるものであった。この場合、子は孵化した翌繁殖シーズン両親の巣に残ってヘルパーとなり（この段階までならさほどまれではなかった）、そしてその翌シーズン雌親と番関係を持っていた。

・1983年9月10日（於・東大） ソ連鳥学者との集い＜準例会＞

この会は、「鳥の世界展」に関連して来日されていたソ連学者のうち、E・クローツキン氏とV・ドルニク氏に講演していただいた後、お茶など飲みながら談話したものです。初めは鳥学会大会の特別講演なり、正式の例会として場を設けたかったのですが、直前まで日程等が決まらず、関東地方を中心とした方々にしか案内できなかったのは残念でした。

クローツキン氏は、この400年程の間に確認されている900種余りの鳥の絶滅が、主として人間活動によって引き起された様子を、いろいろな例をあげて説明されました。特に鳥の生息環境消失が、今も続いている絶滅の原因の1つであり、そのためには自然環境の保全が必要である。今では、人間が、地球規模で自然環境を残さなければならないことを意識しており、人間と生物圏のかかわりに関する国際計画も進められている、と話がありました。一方、多くの鳥の鳥のように、絶滅する鳥の側にも、その生態に何らかの弱点を持つことが、さらに、生存に適した新しい種が生じていく可能性が予想されるとも述べられました。

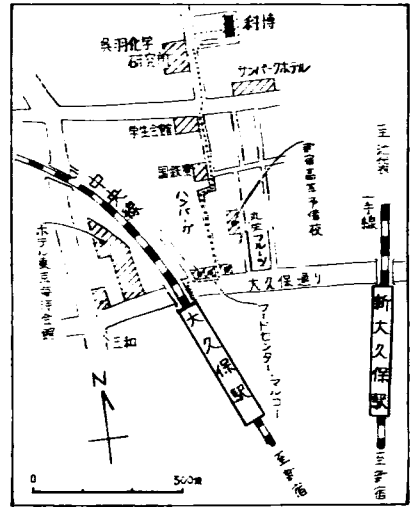
ドルニク氏は、鳥のエネルギー配分に関して興味深い話をされました。眠ったり、躍ねたり、戻ったり、飛んだりという活動によって、それぞれの鳥がそれぞれの環境でどのようなエネルギーの消費率を持ち、また使うエネルギーをどのように配分しているのかを、実験室と野外の両面から明らかにしようとするものです。ソ連とアメリカの学者が協力して、様々な種類のデータが得られ、例えば、飛んでる時間の長い鳥は省エネ型の飛翔をするといったことも示されました。鳥の体重、繁殖期などの季節、気温の3者がわかれば、その鳥がどのようなエネルギー配分をしているのかが、かなりわかるということでした。

最後になりましたが、長時間通訳に奮闘された日本対外文化協会の原田篤子さんに感謝いたします。

## 学会・関係団体地図

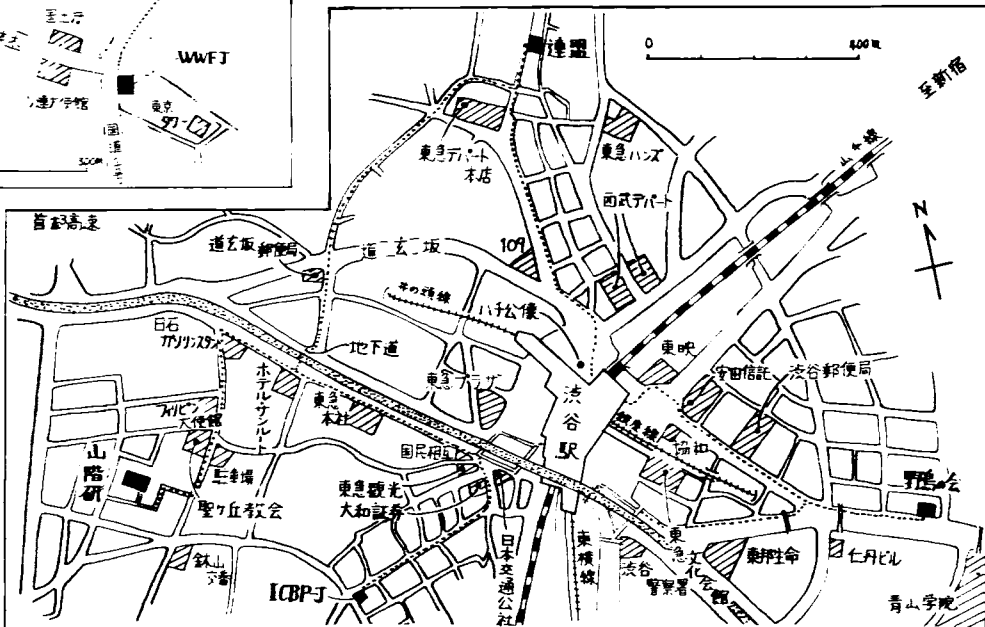
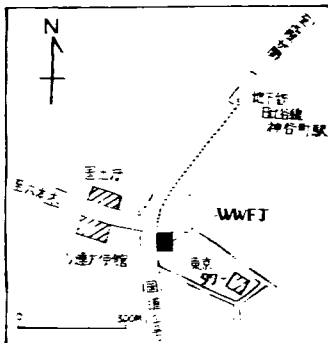
学会のほか、関係団体の道順を示す。東京の地理に不案内な方に役立てていただけたらと思う。各団体ともあらかじめ電話で予約してから訪問のこと。

日本鳥学会 国電中央線大久保駅下車7分。北口を出てすぐ、高架の線路と直交している大久保通りの信号を渡り、右に曲がり、2本目の小路を左に入る。両側に並ぶトルコやラブホテルにめげずに歩く。突き当たりを右に曲がり、またすぐに左に曲がる。国鉄の大久保寮に続き、テニスコートが2面ある。運が良いとヤングギャルばかり。信号のない自動車道を渡って100 m進むと、通称「科博」がある。本館は東京・上野にあり、ここは分館なので注意。駐車可。平日9～17時、土曜は12時まで。〒160 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館内。 364-2311。



山階鳥類研究所など、渋谷駅を中心に4団体の事務所がある。渋谷の駅は谷底にあり、地下に東急新玉川線/地下鉄半蔵門線(相互乗り入れ)、2階に国電山手線・東急東横線・京王井の頭線、3階に地下鉄銀座線が走っていて、最もわかりにくい駅のひとつ。いったん地上に出て、忠犬ハチ公の像の前で方向を定めると良い。傍に交番もある。

日本鳥類保護連盟 像の前にある大きな交差点を斜めに渡ってしまい、歩道を北へ向かう。すぐ左側にファッションビル109が見える。普通イチマルキューと呼ぶが、もともとはトウキュー(つまり東急)に由来する。そのまま歩道をゆるやかに登る。この通りを東急本店通りという。やがてその東急デパート本店を左側に見て、歩道がなくなるが、同じ方向に坂を登る。やがて右側に大きな材木屋がある。その隣





りのビルに「連盟」が入っている。駐車困難。9時半～17時(土・日・祭日も)。〒150 渋谷区宇田川町37-10 渋谷レジデンシャルオフィス405。465-8601。

日本野鳥の会 渋谷駅の東側にある。ハチ公像からは、山手線のガードをくぐり、交差点を渡って、安田信託銀行と協和銀行の間の大きな道(宮益坂という)を登る。坂の途中の左側には大きな郵便局がある。坂を登り切ってそのまま同じ方向に進むと、1～2階が花屋のビルに着く。地下鉄銀座線・半蔵門線の表参道駅から渋谷駅に向かって歩いていても良い。駐車可。月～土曜10～17時。〒150 渋谷区渋谷1-1-4 青山フラワービル5階。406-7141

山階鳥類研究所 渋谷駅の西側にある。像から駅の西側を回って南側へ出ると、山手線の上を直交して高速道路が西へ伸びている。菱形の横断歩道橋を対角に渡り、この高速道路の左下の歩道を登る。東急電鉄の本社、ホテル・サンルートを過ぎ日石のガソリンスタンドの角を左へ曲がる。右側のフィリピン大使館、聖ヶ丘教会を過ぎて下り坂の途中、最初の右側の小路に入る。この小路は、高いコンクリートの壁の間にあり、新日本製鉄南平台寮の表示がある。急な小路を登り切り、小さな遊園地を迂回すると、通称「鳥研」がある。駐車やや困難。月～金曜10～17時 〒150 渋谷区南平台8-20。461-4259, 463-0410

国際鳥類保護会議日本委員会 (ICBPJ) 渋谷駅の南西に位置する。駅からいちばん近い。桜丘郵便局の2階にあるので、道を開くのも簡単。駐車困難。月～金曜10～17時。〒150 渋谷区桜丘町12-6。464-5983。

野鳥の会から他団体へ行くには、いったん渋谷駅まで出た方がよい。連盟から研究所・ICBPJへのコースは、東急デパートの裏を回って道なりに進み、ラブホテルの林立する中を抜けて道玄坂を渡る。さらに進むと、首都高速・玉川通りにぶつかるので、地下道で向こう側へ渡ると、ホテル・サンルートの前に出る。

世界野生生物基金日本委員会(WWFJ) 地下鉄日比谷線神谷町駅が近い。飯倉交差点に立つビルにある。東京タワーとソ連大使館の間に位置している。駐車可。月～金曜9～17時。〒106 港区麻布台2-4-5 メソニック39 森ビル6階。434-2221。トラフィック・ジャパンの事務所もある。

(竹下 信雄)

※ 山階鳥類研究所は1984年11月ごろ、千葉県我孫子市へ移転の予定

## 例会のお知らせ(予定)

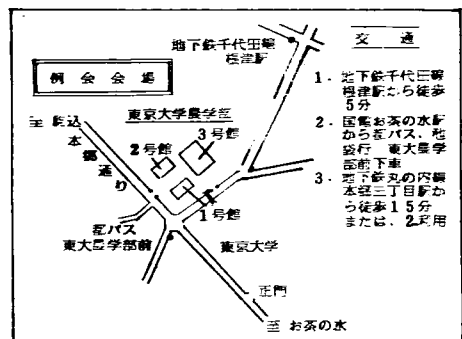
### 1. 1983年12月17日(土) <実施決定>

日本の稀少鳥類、その後と展望 タンチョウ — 百瀬邦和氏(山階鳥研) アホウドリ — 長谷川博氏(東邦大) ヤンバルクイナ — 尾崎清明氏(山階鳥研)

場所: 東大農学部2号館 午後2～4時

### 2. 1984年2月18日(土)

タイ国の鳥類探訪 — 森岡弘之氏(国立科博) アメリカ鳥学会100年記念大会の様子 — 黒田長久氏(山階鳥研)



場所：東大農学部2号館 午後2～4時 <問い合わせ：2月15～18日の間>

3. 1984年3月17日(土)

キツキ類の食性、糞分析から — 松岡茂氏(農林省農研センター) アカゲラの給餌について — 石田健氏(東大)

場所：東大農学部2号館 午後2～4時 <問い合わせ：3月14～17日の間>

講演のあとの短報発表を歓迎します。また情報交換なども行ないますのでご用意ください。

問い合わせ電話番号：03(395)5380

例会予定日の3日前からの午前8時～午後5時までの間のみ

<1984年度分会費をお願いします>

1-12月制の会計年度です。来年度の会費、普通会員4,000円 維持会員10,000円 郵便振替用紙にてお納めください。

なお滞納されている方も合せてお願いします。2年以上お納めいただけない場合は、退会といたしますのでご注意ください。

<「鳥」の原稿募集中>

学会誌「鳥」への投稿を受けています。 <送り先> 〒113 文京区弥生1-1-1

東京大学農学部森林動物学教室 樋口広芳宛

<1983年度大会の記念写真を頒布します>

表紙の写真と同時に撮ったカラー写真をお配けします。切手120円分と住所氏名明記のうえ、下記へお申込みください。

〒274 船橋市三山2-2-1 東邦大学理学部海洋生物学研究室 長谷川博宛

<次号予告 — 特集 地方鳥類誌>

近年、各県別の鳥類目録や鳥類解説書が数多く出版されています。これらの出版物の目録をとりまとめ中です。御意見、要望をお寄せ下さい。また協力を!

また、次々号以降でとりあつかってほしいテーマ、希望など何でもお寄せ下さい。できるかぎりの努力をします。洋書購入法とか鳥類標識技術、あるいは論文の書きかた、など実用的なことでもかまいません。そのほか建設的意見を希望します。 (編集者)

—— 編集後記 ——

竹下信雄さん力作の地図はいかがですか。うまく目的地へたどりつけなかった場合、ご一報ください。3月までの例会の予定が載っています。手帳にチェックして忘れないように。よいお年をお迎えください。(川内)

鳥学 ニュース No. 12

1983年12月5日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館分館内 (電話) 03(364)2311 (振替) 東京1-6599

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷